

北神けいろうの国政報告：9月号

○いつも大変お世話になっています。

先月、韓国の李大統領が我が国の領土である竹島に上陸しました。天皇陛下に対して無礼きわまりない発言もしました。これらは外交常識からいっても、異例、異常な言動であり、絶対に許されない。また、同時期に、香港の活動家たちが、我が国の領土である尖閣諸島に上陸をしました。この活動家たちが、どこまで中国政府とつながりがあるかは調査中ですが、いずれにせよ、厳しく対応すべき話です。

野田政権は、韓国に対しては、竹島について国際司法裁判所への共同提訴を提案しましたが、韓国はこれを拒否しました。我が国としては、世界各国に竹島は日本の固有の領土であることを広く浸透させるためにも、単独で提訴します。また、日韓の政府交流をすべて凍結しました。少なくとも李政権が続く限りは、政府間の話は一切拒否すべきです。韓国に対する措置は、これだけにとどまらず、今後の韓国側の対応を注視しつつ、さらなる制裁的な措置も検討しています。

香港の活動家たちは、国内法に則って、逮捕した上で強制送還をしました。「公務執行妨害」だという見方もありますが、投石などが本当に公務執行を「妨害」するほどのものであるかは、解釈の分かれるところです。また、そもそも上陸を許すべきではないのは、その通りですが、今の海上保安庁に与えられている権限では、なかなか厳しい状況にあります。

まさにこうしたことを見越して、野田政権では、海上保安庁法や領海等外国船舶航行法の改正案を国会に2月に提出していました。8月29日に成立するまで、自民党はじめ野党の抵抗で、ずっとたなざらしにされていました。この法案が早期に成立していたなら、立入検査を省略して退去命令を出し、船長らを海上で逮捕することなど、より実効的な対応がとれていたはずです。残念なことです。

○いずれにせよ、今回は本格的な二正面の争いに発展することが懸念されました。やはり、民間の活動家たちの言動より、国家元首である李大統領の言動を、重たく見なければならぬ。他方で、中長期的にみれば、中国の拡張的外交軍事戦略に対して、同じ米国の同盟国である韓国との連携も重要です。こうした苦しい状況の中でのぎりぎりの対応をとってきています。

政治の覚悟、国民の覚悟が問われている！

より本質的な問題は、国家間の争いは、極限までいくと武力によって解決されるのは、古今東西、歴史の事実です。中国も韓国もそう考えています。米国も同じ。戦後日本だけが、こうした考え方を拒否してきました。今回も、隣国たちは、最後は武力を使う選択肢をもっています。他方、我が国は、事実上「手を縛られながら」喧嘩をしなければなりません。

「毅然たる態度」とをとるということは、最後は相手国に「殴られる」覚悟、そして、それに対して「殴り返す」覚悟がなければ、軽々しくやっちはいけません。「言うだけの国」になりさがってしまいます。

私たち国民にそのような覚悟がどれほどあるのか。離島のために、命をかけるのか。息子を死なせるのか。お孫さんを死なせるのか。少なくとも中国と韓国の国民は、覚悟を決めています。これが、国家間の冷厳な「作法」であります。

○私自身は、国家国民の利益を守るために、また、その誇りを守るためには、こうした覚悟を決めるべきだ、とこれまでも訴えてきました。ただし、これは政治家の信念で勝手に決めるような、軽い話ではない。憲法を含めて、国民的議論も経たなければ、国民に与えられた信託の範囲を逸脱してしまいます。

外交に限らず、「こうあるべき」「こうあったらいいなあ」と理想を語るあまり、足もとの現実を見失ってしまった国家国民は、遅かれ早かれ滅んでいきます。星座を眺めながらも、足は大地に立脚している国づくりのために、全力で奮闘してまいります。